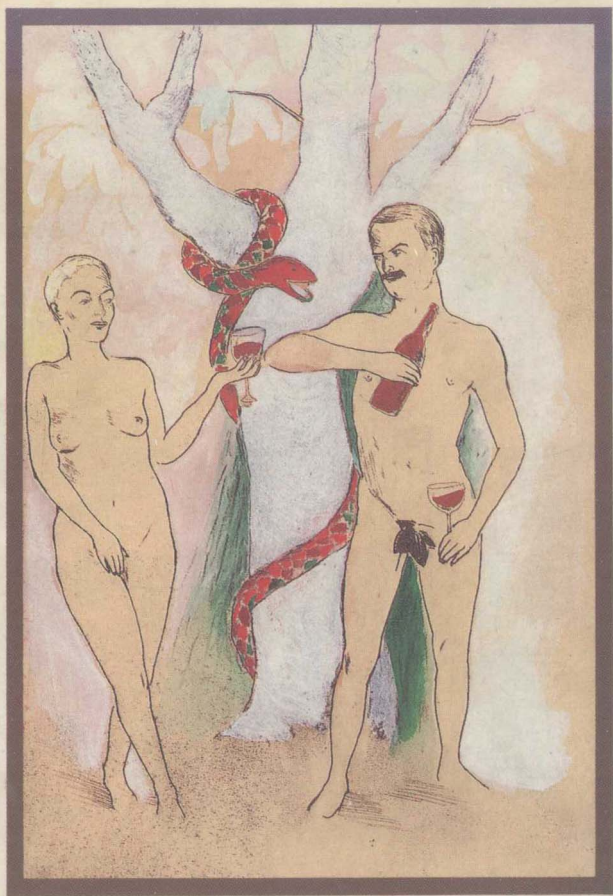


エデンの園

アーネスト・ヘミングウェイ 沼澤治治・訳



集英社

THE GARDEN OF EDEN

by

Ernest Hemingway

Copyright © 1986 by Mary Hemingway, John Hemingway,
Patrick Hemingway and Gregory Hemingway

Japanese translation rights arranged with
Hemingway Foreign Rights Trust c/o Alfred Rice, New York,
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

エデンの園^{その}

一九八九年一月一〇日 第一刷発行
一九八九年二月二〇日 第三刷発行

著者 アーネスト・ヘミングウェイ

訳者 沼澤治^{ぬまざわ ちやうじ}

編集 株式会社綜合社

一〇一 東京都千代田区神田神保町三六―五
電話 (〇三) 二三九―三八一

発行者 若菜 正

発行所 株式会社集英社

一〇一五〇 東京都千代田区一ツ橋二五―一〇
電話 出版部 (〇三) 二三〇―六一〇〇

販売部 (〇三) 二三〇―六三九三
製作課 (〇三) 二三〇―六〇八〇

印刷所 図書印刷株式会社

© 1989 Shueisha

本書の内容の一部または全部を無断複写、複製、転載することを禁じます。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えます。

序

チャールズ・スクリブナー・ジュニア

一九六一年の死去にいたるまで、アーネスト・ヘミングウェイは多くの作品の執筆にたずさわっており、その全部が死後、編集して刊行が可能な程度にほぼ完成していた。メアリー未亡人が、故人となった夫が遺した未刊の原稿のフォトコピーではち切れそうになった大きな買物袋を持って、私のオフィスを訪れた時のことは忘れられない。かくも豊かな文学材料が、これほどあっさりした形で届けられた世にも珍しい例だろう。スケッチ、短篇小説の断片、完成した短篇の数々に加え、この買物袋の中にはタイプ原稿の形で三つの大作が入っていた。すなわちビミニとキューバを舞台とする小説——これは後に『海流のなかの島々』の題で刊行されることになる。さらにヘミングウェイの闘牛ルポルタージュ『危険な夏』の初稿の写し、さらにヘミングウェイが『エデンの園』と題した大部の小説だった。

最後の『エデンの園』は見事な宝で一杯の作品であり、ヘミングウェイが完全に完成することがなかったにもかかわらず、我々はこれを出版すべきであると確信した。未完成なのは後半部だけなので、前半をそのまま用い、ほんのわずかのカットを施しただけで、完全に調和し、首尾一貫した物語が得られたのである。

刊行後、我々がこの作品をこういう方法で出した判断が正しかったことは、本著の世界的な成功と一流批評家たちの積極的な反応で裏づけされたのだった。

ヘミングウェイの他の作品になじみの深い読者たちにとっては、『エデンの園』は彼持ち前のテーマを離れた作品に見えるかも知れない。『エデンの園』は、夫の作家としての成功に対する羨望と自分の性を変えたい憧れとを、自らいかなともすることができない、知性優れた一人の女性の精神状態を徹底的に考察したものだからである。

だがヘミングウェイをそもそも外的な行動だけに専心する作家とする見方は、人間の性格に対する彼の深い関心を見落としているのだ。なるほど表面的には、彼の小説の多くはエクサイティングな物理的事件を扱っているように見えるかも知れない。しかし、コンラッド同様、ヘミングウェイはこういう事件が関係者の精神に及ぼす影響を常に最大の関心事としてきたのである。作家としての彼は、人間行動の優れた研究者だった。メアリー・ヘミングウェイがかつて私に語ったことだが、ヘミングウェイは、人で一杯の部屋に入って行き、ほとんど一瞬のあいだにその人々の関係を言い当てるという不思議な勘の持主だったという。

少年時代の思い出を書いた初期の短篇から、後の傑作小説の数々にいたるまで、ヘミングウェイの物語には、行動の表面下からみ合う人間性格のインタープレイが常に見受けられる。『移動祝祭日』の簡潔な性格スケッチは、彼のこの関心事をさらに例証する材料といえる。

思い出すのは、かつて私が彼に、『老人と海』を、ずっと昔『エスクワイア』誌に掲載された原型となる短篇といっしょにして出版したら、学校の先生たちの役に立つのではないか、と提唱し、彼の不興を買ったことである。しばらくのあいだ、私は彼がどうしてあんな反応をしたのか不思議に思ったものだったが、やがてふと気がついた。ヘミングウェイにとっては、全ての物語には内側と外側があるのだ。『エスクワイア』に載った短篇がそうだが、外側は面白い話の土台にはなる。しかし、文学作品の土台となりうるのは、彼の最後の中篇小説となった

『老人と海』の老人の内心描写が啓示するように、あくまでも物語の内側だけなのである。
『エデンの園』を注意深く読む読者は、きっとこういう喜びを味わい、啓示を受けることであ
ろう。

（訳注——この序文は、一九八七年刊のマクミラン、コリアー・ペーパーバック版に寄せられた
もの）

エデンの園

第一部

二人はその時ル・グロ・デュ・ロワのホテル住まいで、そのホテルは城郭都市のエギユ・モルトに発しまつすぐ海へ注ぐ運河のほとりにあつた。カマルグの低地越しにエギユ・モルトの尖塔が並んで見え、二人は時間の前後はあつてもほとんど毎日、自転車に乗って運河の縁の白い道を走って出かけていく。朝夕、潮の満ちた時に鱸が運河に入ってくると、逃げ回る鰻が狂おしく跳ねるのが見え、二人は鱸がこれに突っかけてむくむくと水をたぎらすのを見守るのだった。

快く青い海に栈橋が一本突き出し、二人はこの栈橋から釣をし、浜で泳ぎ、毎日、漁師が細長い地曳網で魚をだらだら下りの長い浜に引き上げるのを手伝った。海を向いた角のカフェでアペリチフを飲みながら、獅子湾の鯖船の帆を眺めることもある。春も更けて、鯖が来る頃だったから、港の漁師たちはひどく忙しい。陽気で気さくな町で、この若い二人は彼らの宿が気に入っていた。二階に四部屋、階下は運河と灯台を望むレストランにビリヤード台が二つ。二人の部屋はゴッホの絵のアルルの部屋に似ているが、ダブルベッドと二つの大きな窓があるところが違う。

窓からは海と、淡水塩水入り混じった沼地を隔てて、パラヴァの白い町と明るい浜が見通せた。

始終腹が空いている——食べ三昧の二人だったが。空き腹抱えての朝食はカフェで食べ、ブリオシュ、カフェ・オレに卵ときめていたが、今日ほどのジャム、卵はこうしてと選ぶのに胸が弾む。朝食を待つ空き腹で若い女はコーヒーが来るまで頭が疼いて困ることもよくあった。しかしコーヒーでたちまち直る。ブラックで飲むのが彼女の好みで、男はようやくその辺を心得るようになっていた。

この日はブリオシュに赤木苺のジャム、卵は半熟、これにバターが少々、カップの卵をかき回し、こころもち塩を加え、ミルを回して挽いたペッパをふりかけるうちにバターは溶けた。どれも大きな生み立て卵で、女のは男のよりソフトに上げる。この加減はすぐ飲み込め、男は自分のを嬉しく食べた——スプーンで卵をこま切れにし、流れるバターの露気だけで食べる——早朝の爽やかな肌ざわり、粗挽きのペッパの粒立つ歯ごたえ、熱いコーヒー、チコリーの香りがするボウルに注ぐカフェ・オレと、どれも嬉しい。

漁船はだいぶ沖に出ている。暗いうちに朝の一番風を拾って出て行くのを、男と女は目を覚まして聞き、それからシートに身を寄せて丸まり、もう一度眠った。外が明るく部屋はまだ影深いうちに半ば寝呆けの交わりをし、抱き合ったまま横になり、満ち足りて疲れ、もう一度交わった。あげくはひどい空腹で、朝食まで命が保ちそうもない気がしたもの、今はこうしてカフェに来、食べながら海と沖の帆を眺め、新しい一日が始まる。

「何考えてるの？」女が訊いた。

「何も」

「何も考えないはずない」

「考えずに感じてる」

「何を？」

「幸せを」

「私はとにかくお腹が空いてお腹が空いて。異常なのかしら？　あなた、した後でお腹が空く？」

「相手を愛してればな」

「その辺はよくご存知だものね、あなたは」

「でもないさ」

「いいのよ。私は満足だし、私たち悩み事なんて何一つない、そうでしょ？」

「そう、何一つ」

「これからどうする？」

「さてな。君は？」

「どうでもいいの。あなた、釣なさりたければどうぞ。私、手紙一つ二つ書くから。そしてお昼御飯の前に泳ぎに行きましょう」

「お腹を空かすため？」

「それを言わないで。私、もうお腹空きかけてるの、朝御飯がまだ済んでないっていうのに」

「昼飯のことを考えちゃいけないって法はないさ」

「お昼の後、どうする？」

「昼寝だ、いい子がするみたいに」

「新案特許だわ、それ。どうして今まで思いつかなかったのかな？」

「僕は時々ひらめく人間だからな。発明工夫型だよ」

「私は破壊型。あなたを滅ぼしてあげる。ホテルの私たちの部屋の外の壁に、記念の標示板が出るわ、何某ここに滅ぶって。私、夜中に目を覚まして、あなたにしてやるんだ、あなたが聞いたことも思ったこともないような事を。ゆうべもしてやろうと思ったけど、^{ねむ}睡くて睡くて」

「君みたいな睡たがりは安全無害さ」

「油断大敵よ。さ、朝御飯とつとと済ませて、次はお昼御飯」

二人は船具屋で売っていた縞模様の漁師用のシャツにショーツ姿、まっ黒に陽焼けして、髪は陽と塩ざらしであちこちに色褪せた筋が走っている。夫婦と名乗らずにいと、いつも兄妹に見間違えられた。夫婦だと言っても信用されぬこともあり、女はそれがとても嬉しい。

その当時は夏地中海に来る人はほとんど無く、ましてヤル・グロ・デュ・ロワに来るのは、ニームからのほんの僅か^{わず}の連中に限られていた。カジノも無い、娯楽一切無いというわけで、暑い

盛りの海水浴客を除けば、ホテルは空っぽである。漁師用のシャツが流行るなどまだ先の話で、男は妻以外、このシャツを着た女を見かけたことがない。お揃いで着るためにこのシャツを買ったのは女のほうで、ホテルの部屋の洗面台で洗い、柔らかくしたのだった。酷使に堪えるごわごわの生地だったが洗いざらしで着ているうちに柔らかくなり、ふと見ると、着なじんだ生地が妻の乳房の線をきれいに浮きたたせている。

この漁村ではショーツ姿で歩き回るのも前代未聞で、女も自転車で出かける時はショーツははかなかった。しかし村の中ではおかまいなし。村人は皆気がよく、眉をひそめるのは、村の教会の神父だけである。それでも女は日曜になると、スカートに長袖のカシミアセーター、髪はスカーフで包んで、教会のミサに出かけ、男は村の男たちといっしょに教会の後ろ側に立った。お布施は二十フランで、これは一ドル以上になる。神父が自分で集めて回ったので、夫婦の教会に対する態度は理解され、村でのショーツ姿も、カマルグ一帯の港町の風紀に対する挑戦ではなく、外人の気まぐれとみなされたのである。神父は二人がショーツ姿でいる時は口を利こうとしなかったが、公然と非難することもなく、日が暮れて、ズボン姿になった二人に会えば、たがいにお辞儀する間柄だった。

「戻って手紙書くわ」立ち上ると女は給仕に微笑みかけ、カフェを出て行った。

「ムツシューは釣ですか？」男が給仕を呼んで勘定をすると、給仕が訊いた。男はデイヴィッド・ポーンという名だった。

「そのつもりだが。潮の加減はどうだね？」

「絶好です。よけりや餌えきもありますよ」

「途中で買うよ」

「いや、家うちのをお使いなさい。みみずがどっさりあるから」

「君は来られないかい？」

「勤務時間ですよ。でも後で見物に行けるかも知れない。道具は？」

「ホテルにある」

「じゃ餌取りにお寄りなさい」

ホテルで部屋に戻り、妻の所に顔を出そうとしたがやめ、鍵の下げてある机の裏から、長い竹の継ぎ竿さざおと道具を入れた籠かごを取り、再び明るい道に出、カフェに寄ると、陽のまぶしい栈橋に行った。陽ざしは暑いがひたひたと風が吹き、潮はちょうど引き始めたところ。キャスティング竿とスプーンを持ってくればよかったな、と男は思う。キャスティングなら運河からの流れ出しを越え、向こうの岩場をまたいで投げ込めるのだが。代りに長い竿にコルクと羽軸の浮きという仕掛けで、魚が食っていきそうな深さにそつとみみずを流してみた。

しばらく釣ったが戦果なしで、男は青い海を行きつ戻りつ間切る鯖船さばふねや、高い雲が水面に落とす影に見入っていた。と、いきなり浮きがずぶつと潜り、糸が急角度に引き込まれた。竿を立てて合わせると強い引きで暴れ回り、糸が水面に音を立てて走る。できるだけ軽く撓ためてゆくと、